



平成30年1月15日 永眠 享年49

訃報

信定 克幸 准教授逝去

略歴

- 平成 3年 東北大学理学部 卒業
- 平成 7年 東京大学大学院理学系研究科博士課程 中退
- 平成 7年 分子科学研究所 理論研究系 助手
- 平成11年 北海道大学理学部 助手
- 平成16年 分子科学研究所 准教授

安池 智一 (放送大学教養学部 教授)

信定さんの話、聞いた？ —— お、どっか栄転でもされるの？ 私はこんな間抜けなやりとりで他でもない信定さんの死を知った。視界が狭くなり、さっきまで聞こえていたはずの居室のベースノイズも聞こえない。ひとり虚空に取り残され、世界が遠くへ離れていこうとする。これは血の気が引くと呼ばれる状態なのだと認識できてようやく、正気を取り戻した。一方で、冷静になればなるほど全く実感を持つことができなくなった。岡崎に行けば「おお最近どうしてんの」と笑顔で迫ってくる信定さんに会える気がしてならない。

2004年の秋、当時全く面識のなかった信定さんから、一通のメールを受け取った。今度助手の公募をするから一度話をしないかとお誘いだった。こちらの話は多分に曖昧模糊としたものだったが、その模糊模糊具合がかえって「なんかよう分からんけど面白い」ということになったらしく、助手として採用して頂くこととなった。翌7月に着任してみると「自分と一緒にやる必要はない、やりたいことを自由にやったらいい。ただし、昔やっていたことは忘れるように」とのことで、これには大変面食らった。ただでさえ准教授のグループは小さく、片腕となるべき助手が好きなことをしてはいけなはずだ。そのように直訴もしたが「いろんな話があった方が面白いやん」と一蹴された。

思い返してみるに、信定さんの価値判断のほとんどは面白いかどうかにかかっている。そしてそのせいか、周りはいつも多くの面白い人たちでごった返していた。先日の偲ぶ会もまさにそのような雰囲気、信定さんはあの雑踏のなかにこっそり紛れ込んでいたような気がしてならない。閉会が近くなり、ご家族のスピーチがあった。奥様によれば、最後まで快復を信じ車椅子のパンフレットを見ながらホーキング博士になれると盛り上がっていたとのこと。お子さんたちのスピーチには、ああ見えて本当はとても生真面目な信定さんを彷彿とさせる場所があった。あの多忙な生活のなかで、父としての役割も果たしていたとは驚きであった。ふと私に娘が生まれたときに大変喜んでくれたことが思い出され、「ちゃんと面倒見てやらなあかんよ」という声が聞こえたような気がした。グループの秘書だった山田さんは泣きじゃくっていた。

私は信定さんの助手であったが、信定さんにとっては子供のようなものだったのかもしれない。近い人によると「安池を伸ばしてやるにはもっと厳しくした方がよかったかな」と漏らしたことがあったという。当初これを愚痴ととった不明を恥じたい。あくまでも「伸ばしてやるには」どうしたら良かったかを問題としているのだ。本来同志であるべき助手なのに、大事に育てていただいた。何とも不甲斐ないことだ。

私自身が新しい職場の仕事に集中すると決めた5年間のゴールが見えた昨年春、研究プロジェクトに入らないかとお誘いを受けた。来年からお願いしますと返事をした。そしてその機会が訪れることはなく、これまで受けた大きな大きな恩を返さないまま、信定さんはどこか遠くに出かけてしまった。賑やかなところが好きな人だったから、みんなでワイワイしていればふらりと遊びに来てくれるかもしれない。そんな場で「安池は最近どうしてんの」と尋ねられたとき、多忙を言い訳にせず、ちゃんと面白がってもらえるような研究をすることをここに誓いたい。またのんびり見守っていてくれますか。

谷村 吉隆 (京都大学理学研究科 教授)

信定さんとまた飲みに行きたいな。科学のあり方を議論して杯をかわし、真面目でも不真面目でもない夢を語った信定さんと。弱い者には優しく強い者には立ち向い、冗談するけど、とてもシャープな信定さんと飲みたいな。信定さんは病気で亡くなってしまったけど、最近わかった。仲間が集まり飲み会をすれば、信定さんがそこにいることを。真面目でも不真面目でもない夢を実現しましょうと、語っている信定さんがいることを。

矢花 一浩 (筑波大学計算科学研究センター 教授)

信定さん、突然の、あまりに早い別れでした。一緒に仕事をする時は、いつも楽しかった。まだまだ続くものばかり、思っていました。残念でなりません。信定さんが、最後まで弱みを見せることもなく、研究に打ち込み、仲間を思いやっていたこと、忘れません。第一原理計算に基づく新しい計算光科学を作りあげること、SALMONを国際標準に、デファクトスタンダードにすること、残された仲間とともに、必ずやり遂げます。安らかに見守ってください。

根岸 雄一 (東京理科大学理学部 教授)

信定先生とは、良い研究仲間であり、また良い飲み友達でもありました。亡くなられる直前まで共同研究を行なわせて頂きましたし、分子研時代には、飲み会メンバーにも加えて頂き、2次会、3次会までよく飲み続けました。そうした信定先生の突然の悲報には本当に残念でなりません。ただ、信定先生との思い出は今でも私の中では鮮明ですし、そうした思い出については、一生大切にしていきたいと思います。

加藤 毅 (東京大学大学院理学系研究科 准教授)

東北大学理学部で互いに理論化学を目指す同級生として研究室に配属された時からの付き合いであった。4年生の時には電磁気学の教科書を買ってきて、青二才の真剣さで輪読を行った。その後も学会などの場で一緒になるたびに幾多の痛飲と議論を行った。昨年9月の東北大学構内での議論が最後となってしまった。その時、私は親友として、確かに、信定から励まされていた。このようなことを思い出しておられる方は私ばかりではあるまい。

八井 崇 (東京大学大学院工学系研究科 准教授)

信定さんは、どんなに忙しい時でも、また非常にお辛い時期でも、それを微塵も見せることなく、研究の哲学を示して頂くとともに、哲学の実現のために全力で取り組む姿勢を示して頂きました。信定さんのご尽力にいくら感謝しても感謝しきれません。その遺志を継ぐことができるよう、全力で研究に取り組んでいきたいという気持ちが、日が経つにつれて増すばかりです。信定さんの生前の姿、行動を偲びつつ、心からご冥福をお祈りします。

斉藤 真司 (理論・計算分子科学研究領域 教授)

東ねた電源ケーブルで5cmほど開けられたドア。これが居室に入っても良い時のサインだと、信定さんの隣に引越して程なくして察した。わずかに開けられたドアの向こうで交わされた多くの他愛ない話、家族の話、そして真面目な話。夜中の静かな南実験棟は我々にちょうど良かった。留守勝ちになってからも、サインの出された居室で互いにいろんな話を楽しんだ。予定満載で岡崎に来ている信定さんにとって迷惑な客だったに違いないが。サインが出たらまた話に行きます、お預けにしていたワインでも持って。

飯田 健二 (理論・計算分子科学研究領域 助教)

6年間、信定グループのメンバーとしてお世話になりました。大学院を出たばかりの未熟だった私と真摯に向き合ってく下さり、プロの研究者として鍛えて頂きました。そしていつも、研究への情熱をお持ちで覇気に富んでおられました。今は、信定先生ならどんな反応をするかなと想像しながら、研究生活を進めています。そうして、私達の心の中にいるのだなと思いつつ、毎日を過ごしています。ご冥福を心からお祈りします。本当に、ありがとうございます。